

崎津の歴史

◆崎津の港

羊角湾の北岸に位置する崎津は、古くは佐志の津とも呼ばれていました。永禄6(1563)年に、キリスト教の布教のために日本を訪れた、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが著した「日本史」によると、同12(1569)年にアルメイダ修道士が河内浦(現在の河浦町)でキリスト教の布教を開始し、インドから来る船を迎えるため、Saxinoccu



▲文政6(1823)年に描かれた「天草嶋崎津港近郷海濱要図」(九州大学記録資料館所蔵)

◆漁業の発展

崎津は、江戸時代になると漁業集落として発展します。これは、天草・島原の乱後、天草が幕府の直轄地である天領となり、漁業が定浦制度のもとで営まれたからです。定浦制度とは、荷子役といわれる水夫や船の調達などの役目を負うことで、その見返りとして漁業を営む権利が与えられるという制度です。崎津は万治2(1659)年に定浦の指定を受けたことが、漁村が成立する契機となり、荷子役を負った人々たちによって集落が形成されていきました。

(崎津)という港を確認したとあります。このことから、崎津は16世紀ごろから港の条件に適した地形であり、西洋にも知られていたことがわかります。また、江戸時代には外国船を監視するための遠見番所が設置され、不審船や漂着船の対応をしたほか、近世から近代にかけては、長崎を中心とした貿易や石炭搬出などの流通・往来の拠点として、天然の良港をいかした港湾都市の機能が形成されました。

崎津に残る独特の景観要素 「トウヤ」と「カケ」

崎津の西側に位置する下町・中町・船津地区は、湾内のわずかな平地に家屋が密集しています。このため、「トウヤ」と呼ばれる幅約90cmの小路が数軒ごとに通り、漁村の生活に密着した交流の場にもなっています。また、海上には竹やシュロを利用した「カケ」と呼ばれる構造物が設けられており、漁船の停泊や魚干しなど、生活上の施設として利用されています。



▲家の海側に設置されている「カケ」



▶海まで続く細い小路「トウヤ」

「ゴールではなく、むしろスタート」

インタビュー



富津地区振興会 増田哲也会長

先人たちが残してくれた崎津の景観のすばらしさを認めてもらい、たいへん喜んでます。私たちも、先人に感謝しながら、この財産を後世に引き継いでいかなければと、あらためて感じています。一方で、地元の住民として思うことは、地区内の少子高齢化が進む中、「今回の選定をいかに地域の活性化につなげることができるか」ということです。そこで、富津地区振興会では、NPO「さいのつ」と共同で文化の保存・継承や観光客の利用を目的に、市の補助事業やふるさと応援寄附金を利用して「カケ」を整備しました。また、住民レベルでは、訪れる人々たちに対して笑顔であいさつや声かけをするなど、気持ちの「おもてなし」を心がけるようにもしています。私たち住民にとっては、重要文化的景観に選定されたことはゴールではなく、むしろスタートです。これからも、崎津の景観をいかした地域づくりに取り組んでいきたいと思ひます。



▶整備した「カケ」

独特の文化的景観を形成していると高く評価

このように、「天草市崎津の漁村景観」は、貿易や石炭搬出など流通・往来の拠点として、また、豊かな漁業資源が集積する漁港としての機能を持つ集落が、「トウヤ」や「カケ」などの特徴的な生活上の施設を伴いながら成り立っており、このことが独特の文化的景観を形成していると高く評価されたものです。

今後の計画

現在、市では地元住民や関係団体と連携し、「崎津のランドデザイン」の策定に取り組んでいます。これは、崎津の景観を守りいかしていくことで、地域振興を図る崎津の将来構想となるものです。そのためのワークショップを開催し、景観に配慮した地域あり方やあらたに整備が必要なものに関するほか、観光客の受け入れ体制や案内ボランティアの充実などを協議し、参加者からは活発な意見が出されました。一方、崎津の景観と一体性をな



▲ワークショップの様子

している今富地区は、歴史や文化、社会構造など密接な関係にあり、特に潜伏キリシタン関係の史跡や風習は注目されていることから、選定区域の追加を目ざして保存調査・計画を作成しています。

このほか、「天草町大江地区」や「倉岳町棚底地区」においても、重要文化的景観の選定に向け保存調査を実施しています。

※「天草市崎津の漁村景観」に関する詳しいことは、本庁(別館)文化課世界遺産登録推進室 ☎1111 内線2536へお尋ねください。